

母親の内的作業モデルが情動共感性、 自己統制機能に与える影響

The effects of Mother's internal working model
on their emotional empathy and self-control

松 田 久 美
MATSUDA Kumi

問題と目的

母親が有するパーソナリティ特性や、育児に関連するストレスの度合いが、母親の育児意識や育児における感情に影響を及ぼしていることはこれまで多くの研究結果から明らかにされてきた（例えば、野澤、1989；佐藤・菅原・戸田・島・北村、1994；安藤・無藤、2008；荒巻・無藤、2008；塙崎・無藤、2006）。例えば、石・桂田（2010）では、他者との協調的関係を重視する「相互協調性」が高い母親ほどディストレス（うつ傾向や育児不安）は高く、他者と嵯別される個人の独自性を強調する「相互独立性」が高い母親ほどディストレスは低くなることが示されている。また、子どもの存在や育児が母親に生きがいや幸福感をもたらすとともに、不安や育児困難感といった拮抗した感情を母親にもたらすということも、これまで多くの研究によって明らかにされている（例えば、柏木・若松、1994；柏木・平山、2003；柏木・平木、2009；川井・庄司・千賀・加藤・中村・谷口・恒次・安藤、1998；牧野、1982；大日向、1988）。こうした、ネガティブな感情や、喜びと不安が交錯する複雑な感情を多くの母親たちが抱く状況にあってもなお、子どもの感情状態に対応した一貫性のあるはたらきかけや応答をもたらす要因とはいかなるものなのであろうか。その要因を、母親要因に限定した場合にはいかなる変数が挙げられるだろうか。

その一つとして、母親の「内的作業モデル（IWM）」が考えられる。その根拠は、母親のIWMと母親の子どもに対する感受性や応答性との関連性が示されてきたこと（例えば、Main, Kaplan, & Cassidy, 1985; Ward & Calson, 1995）にある。Bowlbyが提唱するに至った「IWM仮説」における「内的作業モデル」とは、愛着対象との安全感を設定目標とした持続的な相互交渉を通して人の内部に形成される自己と他者に関する心的表象を指し、アタッチメント・パターン（スタイル）、すなわちアタッチメント行動の個人差をもたらす個人特有の心的ルールである（例えば、Bowlby, 1969/1976, 1973, 1980; Collins & Read, 1994；久保, 2003；戸田, 1991）。それは、愛着対象との関係の中で、自己と他者に関するIWMが構築され、発達に伴って出会う愛着対象との愛着に関連した出来事を要素として、個人の内部に体制化されていき（戸田・詫摩, 1988；戸田, 1991），対人関係のテンプレートとして適応するよ

うになる（数井・遠藤・田中・坂上・菅沼, 2000）と解説されている。精神分析理論を踏襲した Bowlby であったが、Freud をはじめとする精神分析学者たちが、成人の症状や行動を説明するために回顧的アプローチを行ったのに対し、Bowlby は乳児の直接観察を通して人格機能の初期段階を記述し、そこから未来を予測するというアプローチと回顧的アプローチの双方から得られた知見を連結することにより、人生早期の出来事と後の人格構造および機能との関連がより明らかになることを目指した (Bowlby, 1969/1976)。また Bowlby は、対象関係論を展開した Klein からスーパーバイズを受けており、乳幼児期からの養育者との関係を重視する考え方や、関係が内在化されるという考え方において、対象関係論学に由来するところが多い点についても随所で触れている（例えば、Bowlby, 1969/1976, p.20-21, p.216-217, p.383-386, p.440）。こうした歴史的変遷を経て「IWM 仮説」は体系化され、近年においては、「成人または乳幼児の症状や行動の説明」といった個人特性の生成メカニズムの解明のためばかりではなく、「IWM の世代間伝達」のメカニズムを説明しようとする研究（例えば、遠藤, 1992；数井・遠藤・田中・坂上・菅沼, 2000）にも用いられている。「IWM の世代間伝達」とは、ヒトが親となった時の養育行動が、親自身の IWM を反映することにより、親に内在化された対人情報処理のパターンが子どものそれとして受け継がれる可能性を意味している。このことはすなわち、母親の IWM が働いた結果生じる「対人的認知」の傾向が、子どもの感情状態への感受性やそれに対応した応答を規定する可能性を示唆していると考えられる。

ところで、IWM は構成概念であり、潜在変数である。したがって、成人の IWM の機能の仕方を説明するために「アタッチメント・スタイル」を観測変数として用い、IWM と脳活動との関連性（例えば、Strathearn, Fonagy, Amico and Montague, 2009）、IWM と対人の情報処理との関連性（例えば、金政, 2005；島, 2009；島, 2010；島・福井・金政・野村・武儀山・鈴木, 2012；戸田・芳賀, 2013）、IWM とパーソナリティとの関連性（例えば、長谷川・戸田, 2008）などの検討がされてきた。また先行研究においては、「成人のアタッチメント・スタイル」を幾種かの異なる測定法により求めている。このことは、構成概念としての IWM を説明する変数が、同質のものとして測定されていない可能性を意味している。例えば、上記の Strathearn et al. (2009) には AAI (Adult Attachment Interview) という面接法が用いられている。また、以下の研究はどれも質問紙法によって行われたが、それぞれに用いられた質問紙尺度は異なっている。Mikulincer and Orbach (1995) には RQ (Relationship Questionnaire; Bartholomew & Horowitz, 1991), Baldwin and Kay (2003), Fraley et al. (2006) と Shaver and Mikulincer (2007) には ECR (Experiences in Close Relationships; Brennan, Clark & Shaver, 1998) が用いられ、長谷川・戸田 (2008) と戸田・芳賀 (2013) には内的作業モデル尺度（詫摩・戸田, 1988；戸田, 2001），金政 (2005)，島 (2010)，島・福井・金政・野村・武儀山・鈴木 (2012) には ECR の邦訳（中尾・加藤, 2004）の一般他者版（以下、ECR-GO とする）が用いられている。ECR は恋人を対象としたアタッチメント・スタイル尺度であるため、一般的他者を対象とした尺度として ECR-GO が作成された。さら

に、RQ (邦訳版はRQ-GO), ECR, ECR-GOはどれも、2次元軸により成人アタッチメント・スタイルを捉えようとするものであり、親密な関係を回避する傾向から“他者観”を、見捨てられ不安の度合いから“自己観”を測定し、その結果から4-5種の型に分類する尺度である。然るに、内的作業モデル尺度の下位尺度である「回避尺度」とECR-GOの下位尺度「親密性の回避尺度」、及び内的作業モデル尺度の「アンビバレント尺度」とECR-GOの「見捨てられ不安尺度」とは、ほぼ同じ次元を測定しているとされる(戸田, 2008)。また、いずれの方法によって測定されたアタッチメント・スタイルも、内的作業モデルがもたらした結果であるという点においては異ならない。したがって本研究において、先行研究結果と本研究で得られた結果とを照合する場合には、個々のアタッチメント・スタイルへの作用が仮定される内的作業モデルの“安定性”と“不安定性”とを共通項として議論を進めていく。それは例えば、ECR-GOを用いて得た“不安”や“回避”的個人差は、内的作業モデルの作用の結果生じた“自己・他者に対する期待や信念”(金政, 2003)の違いであり、それらが高いほど“不安定”な内的作業モデルの形成が仮定され、逆に、それらが低いほど“安定”した内的作業モデルの形成が仮定されるものとして扱っていくことを意味する。

さて、一貫性のあるはたらきかけや応答をもたらす母親要因として二つ目に挙げられるのは、「情動共感性」の個人差である。情動共感性とは、「他人が情動状態を経験しているか、または経験しようとしていると知覚したために、観察者にも生じた情動的な反応」(Stotland, 1969)と定義される。先行研究においては、母親の情動共感性が高いほど子どもへの語りかけが多くなる(西野, 1988)、情動共感性の下位概念「感情的冷淡さ」及び「感情的被影響性」が高い母親ほど、育児困難感が強い傾向にある(小原, 2005)といった結果が得られている。また、女子短大生を対象とした調査結果からも、肯定的子ども観の高い群は「感情的暖かさ」が高く、否定的子ども観の高い群は「感情的暖かさ」が低く、「感情的冷淡さ」が高い(藤田, 2007)という結果が得られている。さらに、母親の「感情的暖かさ」が子どものポジティブな共感性を高めるという、母子間での伝達を示す結果(渡辺・瀧口, 1986)もある。これらの結果から、他者の情動を自分自身のそれのように感じとる能力は、女性の子ども観や、母親の育児行動、育児困難感に関連していること、母親の情動共感性は乳幼児の情緒発達に影響することが示唆された。

もう一つの要因として、自らの欲求や意思をコントロールする「自己統制」(Self-Control)の個人差が挙げられる。自身の価値観と現実との間にギャップを感じながら、あるいは、さまざまなストレスに晒されながらも、子どもの感情状態に対応した適切な反応を返そうとする動機づけには、「自己統制」の機能が深く関わっていると考えられるからである。

柏木(1986, 1988)は、児童期における自己統制を検討する上で、人間の行動を、その動機と行動の方向という観点から4種類に分類した。それは、「したくないことをする」、「したいことをしない」、「したいことをする」そして「したくないことをしない」という4つであり、動機と行動の方向が異なる場面では「自己抑制」の側面が機能し、動機と行動の方向が一致す

る場面では抗議や拒否を含めた「自己主張・実現」の側面が機能すると説明している（柏木, 1986, pp.5-6）。こうして柏木（1986, 1988）は、自己統制を2つの側面に分けて捉えることにより、その概念整理を果たしたのである。しかしながら、柏木の研究（1986, 1988）以前も、それ以降も、「自己統制」の定義は多様であり、研究者間でかなりの違いが存在し続けている（畠山・戸田, 2000；塚本, 1997）。例えば、氏家（1978）は、「ある行為の結果を予測し、それに基づいて何らかの制御プランを実行すること」と定義し、4歳児、6歳児、8歳児を対象として実験を行い、誘惑に耐える力とそのために用いる行動パターンにおける年齢群間の違いを検討した。Thorensen and Mahoney（1974）は、「直接的な外的強化が相対的に欠如している状況において、選択可能な他の行動よりも生起確率の低い行動を行うこと」と定義して、自己統制に価値を置く理由を3点挙げている。それはまず、生体の生命の維持に重要な役割を果たしているというものであった。2点目は、社会と密接に関係しているという理由であり、3つ目に、他者の命令や統制に従った行動ではなく、自分自身の意志に基づく行動であることを挙げている。このように様々に定義され、概念が精緻化されないままに、自己統制と個人の認知や行動パターンとの関係性に関する研究（例えば、樋口・鎌原・清水・大塚, 1982；Kopp, 1982; Levenson, 1974; Rotter, 1966, 園田・神宮, 1983）が国内外で多数行われていた。また、柏木（1986, 1988）の後も、国内では、例えば、庄司（1993）は、「動機があるが、社会的にも個人的にも価値がないから行動しない、あるいは動機はないが、社会的にも個人的にも価値があるから行動することである」と定義して、児童を対象とする研究を行った。また、「自己の意志に基づき、直接的な外的強化なしに、自らの行動を調節しようとする能力」と定義した幼児を対象とする研究（中田, 2000）や、「個人が自分の行動や情動、心身の状態を一定の秩序に向けて統制・調整すること」という定義に基づいて、ストレスを自己統制する尺度を作成し、青年を対象とする調査を行った研究（佐藤・河合, 2004）もある。こうした中、塚本（2002）は、柏木（1986, 1988）の概念整理を受け、自己主張・実現と自己抑制はそれぞれ個人的な側面と対人的な側面を持つとして、二次元を仮定した中学生の自己統制尺度を作成した。岡田（2004）は、柏木（1988）と塚本（2002）を参考として、幼児期の子どもの自己統制尺度を作成した。またこうした変遷の中で、幼児期・児童期・青年期における自己統制を測定する尺度もいくつか作成されてきた。しかし、幼い子どもを養育中の母親の自己統制を測定する尺度は見当たらなかったことから、生活者として、母親として、母親たちが抱える欲求や意志、及びその行動をコントロールする機能を測定する「自己統制機能尺度」を作成した（松田, 2013）。本研究では、その尺度を用いて、母親の自己統制機能を測定する。

先にも述べた通り、母親のIWMと母親の子どもに対する感受性や応答性との関連性は多くの研究結果から示されており（例えば、Main, Kaplan, & Cassidy, 1985; Ward & Calson, 1995），子どもの感情状態に対する母親の応答能力（情緒応答性）と情動共感性との間に関連があることも示されている（小原, 2005）。また一方、12～18ヶ月時の愛着のタイプと、やがて32～37ヶ月になった時点での自己統制との間にも関連性が示されている（氏家, 1986）。さ

らに、先述の「IWM仮説」は、発達初期の愛着体験が個人に内在化されることで形成されるIWMが後のパーソナリティに影響するメカニズムを説明しようとするものである。以上から、「内的作業モデル」は「自己統制機能」、「情動共感性」の双方に対して影響を与えることが予測される。

以上から、本研究で設定した仮説は以下の通りである。まず、安定した内的作業モデルによる「安定」した対人的認知特性は、自己統制機能の「自己主張・実現」、「自己抑制」の双方を強め、不安定な内的作業モデルによる「アンビバレント」な対人的認知特性は、逆に、双方を弱める効果を示すであろう（仮説1）。第2に、不安定な内的作業モデルによる「アンビバレント」な対人的認知特性は、情動共感性の「感情の被影響性」を強めるであろう（仮説2）。第3に、不安定な内的作業モデルによる「回避」的な対人的認知特性は、情動共感性の「感情の冷淡さ」を強めるであろう（仮説3）。

方法

調査協力者

北海道E市内・S市内の保育園、子育てサークル実施場所、子育て支援事業実施場所を訪問し、協力者を募り、調査全体の説明をした後、計135名に質問調査用紙と返信用封筒（切手貼付済み）を配布し、回答記入後返送してくれるよう依頼した。そのうち、乳幼児（4～32ヶ月）を持つ母親114名（20～48歳、 $M=33.4$ 、 $SD=5.27$ ）から回答を得た（回収率84.4%）。

調査内容

配布した質問紙は、「フェイスシート」と「内的作業モデル尺度」、「情動共感性尺度」、「自己統制尺度」であった。フェイスシートには、年齢、性別、職業、子どもの数、長子の年齢と性別、末子の年齢と性別を記入してもらった。また、3つの質問紙尺度については以下の通りである。

(1) 内的作業モデル尺度（戸田・詫摩、1988）：「私はすぐに人と親しくなる方だ」、「自分を信用できないことがある」、「あまり人と親しくなるのは好きでない」といった項目から成る。「6. 非常によくあてはまる」「5. あてはまる」「4. ややあてはまる」「3. あまりあてはまらない」「2. あてはまらない」「1. 全くあてはまらない」の6件法で回答を求めた。

(2) 情動共感性尺度（加藤、高木、1980）：「私はまわりの人が悩んでいても平氣でいられる」「私は他人の感情に左右されずに決断することができる」（－）といった項目から成る。「7. 全くそうだと思う」「6. かなりあてはまる」「5. どちらかといえばそうだと思う」「4. どちらともいえない」「3. どちらかというと違うと思う」「2. かなり違うと思う」「1. 全く違うと思う」の7件法で回答を求めた。

(3) 自己統制機能尺度（松田、2013）：「5. はい」「4. はいに近い」「3. どちらでもな

い」「2. いいえに近い」「1. いいえ」の5件法で回答を求めた。

結果

本研究で用いた3つの尺度における因子ごとの得点ならびに α 係数（Cronbach）を算出し、個々の質問項目内容、項目ごとの平均値、標準偏差をそれぞれ示した（Table 1, Table 2, Table 3）。

Table 1 自己統制機能の記述統計量

項目		M	SD
自己主張・実現 ($\alpha = .85$)			
常に、自分の目標を達成しようと努力している。	3.63	0.94	
自分の可能性を十分に發揮しようとしている。	3.54	0.92	
自分の意見や態度をはっきりと示し、簡単に妥協しない。	3.28	0.97	
言いたいことをなかなかはっきりと言えない。（-）	3.96	1.02	
自分がしたいことやしていることについて、夫や家族にちゃんと理解してもらえるよう説明する。	3.98	0.87	
不当だと思うことについては、抗議する。	4.12	0.75	
イヤなことであっても、なかなか「いやです」と言えない。（-）	3.81	0.81	
他人の意見や希望に合わせることが多い。（-）	3.71	0.88	
誤解を受けたときには、きちんと事情を説明して了解を求める。	3.28	1.15	
自分の立場や考えは、しっかりと主張する。	3.18	1.21	
すべきだと思うことは、どんどん実行している。	2.66	1.00	
自己抑制 ($\alpha = .72$)			
他人の迷惑にならないようにしている。	4.39	0.65	
育児中なので、したいことはほとんどがまんしている。	3.16	1.15	
苦手だったり、したくないと思う家事労働もがんばっている。	3.86	0.94	
自分本位な考え方や行動をひかえている。	3.56	0.93	
子ども抜きで、映画を見たり、ショッピングを楽しみたいが、がまんしている。	3.46	1.26	
あまりしたくないこともがんばってしている。	3.56	0.93	
自分の欲しいものなどを買わずにがまんしている。	3.37	1.16	
時間が足りなくてがまんしていることがたくさんある。	3.63	1.06	

注. （-）は逆転項目。

Table 2 内的作業モデルの記述統計量

項目		<i>M</i>	<i>SD</i>
安定 ($\alpha = .78$)			
私は知り合いができやすい方だ。		4.02	1.02
私はすぐに人と親しくなる方だ。		3.94	1.12
私は人に好かれやすい性質だと思う。		3.61	0.95
たいていの人は私のことを好いてくれていると思う。		3.43	0.80
気軽に頼ったり頼られたりすることができる。		3.40	1.02
初めて会った人とでも上手くやっていける自信がある。		3.62	1.17
回避 ($\alpha = .72$)			
人に頼るのは好きではない。		3.75	1.16
私は人に頼らなくても、自分一人で充分にうまくやって行けると思う。		2.73	1.19
あまりにも親しくされたり、こちらが望む以上に親しくなることを求められたりすると、イライラしてしまう。		3.12	1.25
あまり人と親しくなるのは好きでない。		2.54	0.96
人は全面的には信用できないと思う。		3.03	1.27
どんなに親しい間柄であろうと、あまりなれなれしい態度をとられると嫌になってしまう。		3.14	1.35
アンビバレント ($\alpha = .64$)			
人は本当はいやいやながら私と親しくしてくれているのではないかと思うことがある。		2.94	1.02
ときどき友だちが、本当は私を好いてくれていないのではないかとか、私と一緒にいたくないのではと心配になることがある。		3.11	1.17
あまり自分に自信がもてない方だ。		3.96	1.28
自分を信用できないことがある。		2.89	1.19
私はいつも人と一緒にいたがるので、ときどき人から疎まれてしまう。		2.30	0.92
ちょっとしたことで、すぐに自信をなくしてしまう。		3.61	1.24

Table 3 情動共感性の記述統計量

項目		<i>M</i>	<i>SD</i>
感情の暖かさ ($\alpha = .64$)			
私は映画を見るとき、つい熱中してしまう。	5.29	1.31	
歌を歌ったり、聞いたりすると、私は楽しくなる。	5.90	0.95	
私は愛の歌や詩に深く感動しやすい。	4.93	1.29	
私は動物が苦しんでいるのを見ると、とてもかわいそうになる。	6.05	0.97	
私は身寄りのない老人を見ると、かわいそうになる。	5.44	1.03	
私は人が冷遇されているのを見ると、非常に腹が立つ。	5.51	0.97	
私は、大勢の中で独りぼっちでいる人を見ると、かわいそうになる。	5.02	1.21	
私は贈り物をした相手の人が喜ぶ様子を見るのが好きだ。	6.21	0.88	
私は会計事務所に勤務するよりも、社会福祉の仕事をする方がよい。	4.44	1.66	
小さい子どもはよく泣くが、かわいい。	6.09	1.13	
感情の冷淡さ ($\alpha = .68$)			
私は人がうれしくて泣くのを見ると、しらけた気持ちになる。	2.15	1.24	
私は他人の涙を見ると、同情的になるよりも、いらだってくる。	1.98	1.03	
私は不幸な人が同情を求めるのを見ると、いやな気分になる。	3.44	1.39	
私は友人が悩みごとを話し始めると、話をそらしたくなる。	2.06	0.94	
私はまわりの人が悩んでいても平氣でいられる。	2.26	1.03	
私は人がどうしてそんなに動搖することがあるのか理解できない。	2.38	1.16	
私は他人が何かのこと笑っていても、それに興味をそそられない。	2.54	1.13	
人前もはばからず愛情が表現されるのを見ると、私は不愉快になる。	3.16	1.50	
私はまわり興奮していても、平静でいられる。	3.77	1.33	
私は映画を見ていて、まわりの人の泣く声やすすりあげる声を聞くと、おかしくなることがある。	2.16	1.12	
感情の被影響性 ($\alpha = .69$)			
私は感情的にまわりの人からの影響を受けやすい。	4.41	1.44	
私は友人が動搖していても、自分で動搖してしまうことはない。（-）	3.74	1.41	
私は他人の感情に左右されずに決断することができる。（-）	5.38	1.12	
まわりの人が神経質になると、私も神経質になる。	4.98	1.34	
私は悪い知らせを人に告げに行く時には、心が動搖してしまう。	4.24	1.44	
私は小説を読むと、登場人物の気持ちに強く引き込まれてしまう。	3.79	1.27	
私は友人の悩みに感情的にまきこまれてしまう傾向がある。	4.13	1.24	
小説や映画に熱中するのは、ばかりしていると思う。	4.10	1.40	

注. (-) は逆転項目。

内的作業モデルを説明変数（独立変数）とし、自己統制と情動共感性を基準変数（従属変数）として、重回帰分析（強制投入法）を行った。その結果、内的作業モデルの「安定」は自己統

制の「自己主張・実現」を強め ($\beta=.44, p<.001$)、「アンビバレン特」は「自己抑制」 ($\beta=.27, p<.01$) や情動共感性の「感情の被影響性」 ($\beta=.28, p<.01$) を強め、「回避」は情動共感性の「感情的冷淡さ」 ($\beta=.40, p<.001$) を強めることが示された (Table 4)。内的作業モデルの下位概念間の VIF は 1.042~1.266 であり、多重共線性は認められなかった。

Table 4 重回帰分析の結果

<基準変数>	自己統制機能		情動共感性		
	自己主張・実現	自己抑制	感情の暖かさ	感情の冷淡さ	感情の被影響性
<説明変数>					
内 安定	.44***	-.05	.06	.13	-.14
的 作業モ デル アンビバレン特	-.18	.27**	.12	.04	.28**
回避	.16	-.01	-.07	.40***	-.13
<i>R</i> ²	.26***	.09*	.02	.15***	.12**

*** $p<.001$, ** $p<.01$, * $p<.05$

注. R^2 値以外の数値は標準回帰係数 (β) を表す。

以上の結果において、「安定」から「自己抑制」への影響は認められず、「アンビバレン特」から「自己抑制」に対して示された影響性は仮説に反して正の効果であったことから、仮説 1 については一部分の支持に留まった。しかし、「アンビバレン特」は「感情の被影響性」を強め、「回避」は「感情の冷淡さ」を強めることが示され、仮説 2 と仮説 3 は支持された。

考察

安定した内的作業モデルによる「安定」した対人的認知特性は、自己統制機能における「自己主張・実現」を促すことが示された。この結果はすなわち、「他者は応答的で、自己はそうした対応を受ける価値ある存在」という表象を持つことが、自らの欲求や意志の表出及び表現を支える可能性を示唆している。また、不安定な内的作業モデルの表れとしての「アンビバレン特」な対人的認知特性は、自己統制機能の「自己抑制」を強めることも明らかになった。自己に対しても他者に対しても信頼と不信のアンビバレン特な表象を持つ対人的認知特性は、自身の欲求や行動に制約を与えることによって、自己不全感を和らげ、他者からの評価を得ようとするということなのかも知れない。AAI によって「不安・アンビバレン特型（とらわれ型）」に分類される人は、親密さや承認への強い欲求を持ち、拒絶されることや見捨てられることに対する心配が強く、他者の利用可能性や応答性への信頼が欠けているとされる（例えば、Bartholomew & Horowitz, 1991）。こうした特性による他者の非承認に対する警戒感や自己防衛的な意識が、自己抑制を図ろうとする傾向を強めることを示唆する結果とも考えられる。

また、上の2つの結果はどちらも、他者と自己の双方に対して安定した心的表象を抱いているか否かが自己統制の機能の仕方を規定する可能性を示唆している。このことは、（カテゴリカルな尺度か多項目の尺度のいずれかで）アッタチメントが安定型と測定された人はより建設的な葛藤方略を使い、反対に不安定型とされた人（不安・アンビバレント型、回避型の両方を含む）は相対的に建設的ではない葛藤方略を用いること（例えば、Carnelly, Pietromonaco, & Jaffe, 1994; Creasey, G., Kershaw, K., & Boston, A., 1999）とも関連していると考えられる。

また、「アンビバレント」な対人的認知特性は、情動共感性の「感情の被影響性」も強めることも明らかになった。このことは、両極的な対人関係のテンプレートを持つほど、周囲の人々の言動や態度、場の雰囲気といった情報に翻弄されやすい性質を持つことを示唆しており、穏やかな感情状態の維持が困難になりやすいうことによる子育てへの影響が懸念される結果でもある。さらに、「回避」的な対人的認知特性は、情動共感性の「感情的冷淡さ」を強めることが示された。この結果と、「回避」が高いほど乳児に起因する情報よりも、「母親の主觀性」が多く使用されるという結果（島・上島・小林・小原, 2012）とを照らし合わせると、「回避」傾向が高いほど、子どもの感情状態に随伴するのではなく、母親自身の意図や欲求を優先した結果としてのはたらきかけや応答を行う可能性が考えられる。

総合的考察と今後の課題

本研究の結果からは、母親がどのような内的作業モデルを形成しているのかということが、自己統制機能の発揮され方に影響を与えていたことが示された。すなわち、内的作業モデルによってもたらされる対人的認知特性が、自身の欲求や意志と、生活者として母親として突き当たる制約とのせめぎ合い、そこに生じる葛藤の調整に関わっていることが明らかになった。このことから、安定した内的作業モデルを形成しているか否かが、価値観と現実との間にギャップを感じながら、あるいはさまざまなストレスに晒されながらも、適切に自己統制を図れるかどうかの「鍵」である可能性が示唆された。また、「アンビバレント」や「回避」という不安定な内的作業モデルによる不安定な対人的認知特性は、情動共感性に影響を与えることが示され、変動しやすい感情状態での子育てや、自己本位なはたらきかけや応答につながる可能性が示唆された。変動しやすい感情状態からは、子どもへの一貫しない気まぐれなはたらきかけや応答が生じることが想定され、そうした行動様式を通して、「アンビバレント」な内的作業モデルが母子間で伝達されるとも考えられる。また、自己本位なはたらきかけや応答とは、Schaffer (1977/1979) が指摘した「子どもよりも母親自身の願望や欲求のほうに自分を調律する」関わり方であるとも考えられる。子どもの側の要因よりも母親自身の要因が優先される相互交渉を通して、「回避」タイプの内的作業モデルが伝達されることを示唆する結果であるとも考えられる。

最後に、本研究の限界とそこからの発見を今後の課題として以下に述べる。まず、自己統制機能の測定法についてである。本研究では質問紙法を用いて、「したいことをする」、「したいことをしない」といった、欲求や意志に即した行動、反した行動のそれぞれをどの程度取ろうとするのかを「自己評定」により測定した。こうして捉えた「自己統制機能」が、抱いている欲求や意志を行動としてどの程度表出するのか、しないのかという実際の反応と一致していない可能性も否めない。したがって、そうした行動傾向をどの程度反映した尺度になっているのかについて今後確認する必要がある。次に、本研究では、母親の「内的作業モデル」から、「情動共感性」及び「自己統制」への影響を検討した。その結果、発達初期の愛着体験が個人に内在化されることで形成されるIWMは、後のパーソナリティに影響する（Bowlby, 1969/1976, 1973, 1980）ことが確認された。このことから、本研究では取り上げなかった認知特性やパーソナリティ特性など様々な母親要因に対する内的作業モデルの影響もまた予測される。中でも、これまでに検討されていない養育に関わる他の母親要因への影響について検討することが必要であろう。また、母親要因と子どもの側の要因、そして親子を取り巻く環境との相互作用を捉えることもまた必要であろう。その過程で、三要因がどのように作用し合った場合にどのような結果が生じるのか、どのような作用の仕方が、招いてはならない結果を食い止める可能性につながるのかについて検討していくことにより、望ましい養育条件を整えるための方策を見出していくことが、求められる課題であろう。

文献

- 安藤智子・無藤 隆. (2008). 妊娠期から産後1年までの抑うつとその変化：縦断研究による関連要因の検討. *発達心理学研究*, **19**, 238-293.
- 荒巻美佐子・無藤 隆. (2008). 育児への負担感・不安感・肯定感とその関連要因の違い：未就学児を持つ母親を対象に. *発達心理学研究*, **19**, 87-97.
- Baldwin, M. W., & Kay, A. C. (2003). Adult attachment and the inhibition of rejection. *Journal of Social and Clinical Psychology*, **22**, 275-293.
- Bartholomew, K., & Horowitz, L. M. (1991). Attachment styles among young adults: a test of a four-category model. *Journal of Personality and Social Psychology*, **61**, 226-244.
- Bowlby, J. (1976). 母子関係の理論：愛着行動. (黒田実郎・大羽 薫・岡田陽子・黒田誠一, 訳). 東京：岩崎学術出版. (Bowlby, J. (1969). *Attachment and Loss: Vol.1, Attachment*. New York: Basic Books.)
- Bowlby, J. (1973). *Attachment and Loss: Vol.2, Separation: anxiety and anger*. New York: Basic Books.
- Bowlby, J. (1980). *Attachment and Loss: Vol.3, Sadness and depression*. New York: Basic

Books.

- Carnelly, K. B., Pietromonaco, P. R., & Jaffe, K. (1994). Depression, working models of others, and relationship functioning. *Journal of Personality and social Psychology*, **66**, 127-140.
- Creasey, G., Kershaw, K., & Boston, a. (1999). Conflict management with friends and romantic partners: The role of attachment and negative mood regulation expectancies. *Journal of Youth and Adolescence*, **28**, 523-543.
- Collins, N. L., & Read, S. J. (1994). Cognitive representation of attachment: The structure and function of working models. In K., Bartholomew & D. Perlman (Eds.), *Advances in personal relationships: Vol.5. Attachment processes in adulthood* (pp.53-90). London: Kingsley.
- 遠藤利彦. (1992). 内的作業モデルと愛着の世代間伝達. 東京大学教育学部紀要, **32**, 203-220.
- Fraley, R. C., Niedenthal, P. M., Marks, M., Brumbaugh, C., & Vicary, A. (2006). Adult attachment and the perception of emotional expressions: Probing the hyperactive strategies underlying anxious attachment. *Journal of Personality*, **74**, 1163-1190.
- 藤田文. (2007). 女子短大生の子ども観と情動的共感性の関連. 大分県立芸術文化短期大学研究紀要, **45**, 81-90.
- 畠山和也・戸田須恵子. (2000). 青年期における自己統制力質問紙作成の試み. 北海道教育大学紀要(教育科学編), **51** (1), 75-89.
- 長谷川香奈・戸田弘二. (2008). 乳児の情緒的反応に対する内的作業モデルの影響(2)：子育て中の母親の場合. 発達心理学会第19回大会発表論文集, 396.
- Hazan, C. & Shaver, P. (1987). Romantic Love Conceptualized as an Attachment Process. *Journal of Personality and Social Psychology*, **52**, 511-524.
- 樋口一辰・鎌原雅彦・清水直治・大塚雄作. (1981). 原因帰属様式(Attribution Styles)に関する研究(3)：女子大学生の原因帰属様式と抑うつ傾向並びに統制感との関係. 東京工業大学人文論叢, **7**, 141-149.
- 金政祐司. (2005). 自己と他者への信念や期待が表情の感情認知に及ぼす影響－成人の愛着的視点から－. 心理学研究, **76**, 359-367.
- 柏木恵子. (1979). 母親の母性意識について：一般の母親と母子寮の母親の比較を通して. 母子研究, **2**, 22-33.
- 柏木恵子. (1986). 自己制御(self-regulation)の発達. 心理学評論, **29**, 3-24.
- 柏木恵子. (1988). 幼児期における「自己」の発達：行動の自己制御機能を中心に. 東京：東京大学出版会.
- 柏木恵子・平木典子. (2009). 家族の心はいま：研究と臨床の対話から. 東京：東京大学出版会.

- 柏木恵子・平山順子. (2003). 結婚の現実と夫婦関係満足度との関連性：妻はなぜ不満か. 心理学研究, 74, 122-133.
- 柏木恵子・若松素子. (1994). 「親となる」ことによる人格発達：生涯発達的視点から親を研究する試み. 発達心理学研究, 5, 72-83.
- 加藤隆勝・高木秀明 (1980). 青年期における情動的共感性の特質. 筑波大学心理学研究, 2, 33-42.
- 川井 尚・庄司順一・千賀悠子・加藤博仁・中村 敬・谷口和加子・恒次欽也・安藤朗子. (1998). 育児不安に関する臨床的研究IV：育児困難感のプロフィール評定試案. 日本子ども家庭総合研究所紀要, 34, 日本子ども家庭総合研究所, 東京, 117-139.
- 数井みゆき・遠藤利彦・田中亜希子・坂上裕子・菅沼真樹. (2000). 日本人母子における愛着の世代間伝達. 教育心理学研究, 48, 323-332.
- Kopp, C. B. (1982). Antecedents of self-regulation: A developmental perspective. *Developmental Psychology, 18*, 199-214.
- 久保 恵. (2003). 情動的対人情報処理と内的作業モデル. 東京：風間書房.
- Levenson, H. (1974). Activism and Powerful Others: Distinction within the concept of internal- external control. *Journal of Personality Assessment, 38*, 337-383.
- Main, M. Kaplan, N., & Cassidy, J. (1985). Security in infancy, childhood, and adulthood: A move to the level of representation. In I. Bretherton & E. Waters (Eds.), *Growing points of attachment theory and research* (pp.66-104). Chicago: University of Chicago press.
- 牧野カツコ. (1982). 乳幼児を持つ母親の生活と育児不安. 家庭教育研究所紀要, 3, 34-56.
- 松田久美. (2013). 母親の感情読み取り特性における個人差を規定する要因の検討：乳幼児の顔表情に対する反応とパーソナリティとの関連性から. 北海道大学大学院文学研究科心理システム科学平成25年度研究論文II. (北海道大学大学院文学研究科心理システム科学)
- 松本忠久. (1997). 後期青年男子の対人内部作業モデルと自己統制との関連. 秋田経済法科大学法学部紀要, 13, 25-42.
- Mikulincer, M. & Orbach, I. (1995). Attachment styles and repressive defensiveness: The accessibility and architecture of affective memories. *Journal of personality and Social Psychology, 68*, 917-925.
- 中尾達馬・加藤和生. (2004). 成人愛着スタイル尺度 (ECR) の日本語版作成の試み. 心理学研究, 75 (2), 154-159.
- 中田 栄. (2000). 向社会的行動における自己統制の役割とその規定要因の検討. 東京：風間書房.
- 西野美佐子 (1988). Maternal Speechに関する研究 (2) : 情動共感性と子どもとの接触経験とに関連して. 東北福祉大学紀要, 14, 211-223.

- 野澤みつえ. (1989). 親業ストレスに関する基礎研究. *教育学科研年報*, **15**, 35-56.
- 小原倫子. (2005). 母親の情動共感性及び情緒応答性と育児困難感との関連. *発達心理学研究*, **16**, 92-102.
- 岡田いずみ. (2004). 幼児の自己統制力の構造とその発達：2次元自己統制尺度の研究. *早稲田大学大学院教育学研究科紀要*, 別冊**11** (2), 1-10.
- 小野寺敦子. (2003). 親になることによる自己概念の変化. *発達心理学研究*, **14**, 180-190.
- 大日向雅美. (1988). *母性の研究*. 東京：川島書店.
- 大竹恵子・島井哲志・内山喜久雄・宇津木成介. (2001). 情動知能尺度 (EQS: エクス) の開発と因子的妥当性、信頼性の検討. *産業ストレス研究*, **8**, 153-161.
- Rotter, J. B. (1966). Generalized expectancies for internal vs. external control of reinforcement. *Psychological Monographs*, **80**, 1-28.
- 佐藤達哉・菅原ますみ・戸田まり・島 悟・北村俊則. (1994). 育児に関連するストレスとその抑うつ重症度との関連. *心理学研究*, **64** (6), 409-416.
- 佐藤安子・河合優年. (2004). ストレス場面からの回復過程を規定する新しい認知モデル構造の試み. *臨床教育学研究*, **11**, 189-204.
- Schaffer, H. Rudolph. (1979). *母性のはたらき*. (矢野喜夫・矢野のり子訳). 東京：サイエンス社. (Schaffer, H. Rudolph. (1977). *Mother*. Cambridge: Open Books Publishing Ltd, Harvard University Press.)
- 石 喬玲・桂田恵美子. (2010). 保育園児を持つ母親のディストレス：相互協調性・相互独立性およびソーシャル・サポートとの関連. *発達心理学研究*, **21**, 138-146.
- 塙崎尚美・無藤 隆. (2006). 幼児に対する母親の分離意識：構成要素と影響要因の. *発達心理学研究*, **17**, 39-49.
- 島義弘. (2010). 愛着の内的作業モデルが対人情報処理に及ぼす影響－語彙判断課題による検討－. *パーソナリティ研究*, **18**, 75-84.
- 島義弘・福井義一・金政祐司・野村理朗・武儀山珠実・鈴木直人. (2012). 内的作業モデルが表情刺激の情動認知に与える影響. *心理学研究*, **83**, 75-81.
- 島義弘・上島菜摘・小林邦江・小原倫子. (2012). 母子相互交渉において母親が使用する情報：内的作業モデルの影響. *発達心理学研究*, **23**, 36-43.
- 園田雅代・神宮英夫. (1983). 健康安全行動における幼児の自己統制力：P-F スタディ的手法による評価. *教育心理学会総会論文集*, **25**, 214-215.
- Stotland, E. (1969). Exploratory investigations of empathy. In L. Berkowitz (Ed.), *Advances in experimental social psychology* (pp.271-314). New York: Academic Press.
- Strathearn, L., Fonagy, P., Amico, J., & Montague, P.R. (2009). Adult attachment predicts maternal brain and oxytocin response to infant cues. *Neuropsychopharmacology*, **34** (13), 2655-2666.

- 庄司一子. (1993). 児童の self-control の発達的検討. *教育相談研究*, **31**, 47-58.
- 詫摩武俊・戸田弘二 (1988). 愛着理論からみた青年の対人態度：成人版愛着スタイル尺度作成の試み. *東京都立大学人文学報*, **196**, 1-16.
- Thorensen, C., & Mahoney, M. J. (1974). *Behavioral self-control*. New York: Holt.
- 戸田弘二. (1991). Internal Working Models 研究の展望. *北海道大学教育学部紀要*, **55**, 133-144.
- 戸田弘二. (2001). 内的作業モデル尺度. *心理測定尺度集II－人間と社会のつながりをとらえる（対人関係・価値観）* (pp.109-114). 東京：サイエンス社.
- 戸田弘二. (2008). アタッチメント・スタイル尺度間の関連—IWM, ECR, RQ を用いて-. *北海道心理学研究*, **41**, 34.
- 戸田弘二・芳賀信太朗. (2013). 愛着システムの活性化と内的作業モデルの情報処理機能. *北海道大学教育学部紀要*, **64**, 53-69.
- 塚本伸一. (1997). 子どもの自己統制に関する研究心理学的研究の動向 (2). *上越教育大学紀要*, **16**, 421-442.
- 塚本伸一. (2002). 子どもの自己統制に関する研究：2次元自己統制尺度の試み. *日本教育心理学会第66回大会発表論文集*, 1052.
- 氏家達夫. (1986). 生後 2～4 年目における社会・情緒的発達（その 6）：12 ヶ月時の愛着と 32, 37 ヶ月時の自己統制との関係について. *教育心理学会総会論文集*, **28**, 314-315.
- Ward, M. J., & Calson, E. A. (1995). Associations among adult attachment representations, maternal sensitivity, and infant-mother attachment in a sample of adolescent mother. *Child Development*, **66**, 69-79.
- 渡辺弥生・瀧口ちひろ. (1986). 幼児の共感と母親の共感との関係. *教育心理学研究*, **34** (4), 324-331.

The effects of Mother's internal working model on their emotional empathy and self-control

MATSUDA Kumi

Abstract

The purpose of this study was to investigate the effects of mothers' internal working model on their emotional empathy and self-control. In this investigation, three questionnaire surveys of 114 mothers with 4- to 32-month-old children were conducted. The results showed that how the mothers' internal working model was formulated was influential both in their self-control and in their emotional empathy. The results also suggested the possibility that to have secure internal working model was a key to exercising a properly functioning self-control. In addition, it was indicated that insecure individual recognition about others' emotions caused by insecure internal working model might bring about emotionally unstable child-rearing or self-centered approach and response to their children.

Key Words: Internal working model, Emotional empathy, Self-control